

寄稿：学際性とは

「学際」は比較的新しい言葉で、岩波国語辞典第3版（1979）によると—2つ以上の科学の境界領域にあることを意味し、interdisciplinaryの訳語として、「国際」にならって昭和40年代に作られた語である—との説明がなされている。最近の辞書では、このような詳しい説明は無く、「いくつかの異なった学問分野がかかわること」などと書かれている。辞書としてはこれで十分な説明であろうが、「かかわっていること」あるいは「境界領域にあること」だけで、学際性の真の姿を表していると言えるのだろうか。



たまたま筆者が勤務していた大阪大学基礎工学部は、科学と技術の融合をめざして1961年に創立された新しいコンセプトの学部であるが、その玄関ホールに、「科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発、それにより人類の真の文化を創造する学部」と書かれた額がかかっている。これは、学部設立に多大の貢献をされた故正田建次郎先生が、創立10周年に当って残された言葉である。

「学際」という言葉は使われていないが、この言葉は、その意味するところを的確に述べていると思われる。すなわち、学際性は、単に複数の分野の境界領域にあるだけではなく、これらを融合することによって新しい価値あるものを創り出してこそ、はじめてその意義があることが示されている。

身近なところから一例を挙げると、光エレクトロニクスは、レーザーを中心として光学技術とエレクトロニクスを融合した新しい科学技術分野であり、それによって、光ファイバ通信や光ディスクシステムなど顕著な成果を産み出した典型的な学際分野であるといえる。

次の世紀にかけての科学技術の発展においても、学際性という観点はますます重要な役割を演じるであろう。

評議員・末田 正
(摂南大学工学部 教授)